

私のすすめるこの1冊

藤浪 理恵子 (理学科 講師)

『生命 40 億年全史』

リチャード・フォーティ (著)、渡辺政隆 (訳)

「地球は今何歳でしょうか？」

授業でごくたまに学生さんたちにこの質問をする。みんなよく知っており、45、46億という数字がきちんとでてくる。しかし、我々のご先祖さまはどのくらい前に地球に現れたのでしょうか？という問いに対しては、なかなか難しいらしく、答えに詰まる。それは当然のことで、「我々のご先祖さま」とは一体何を指しているのか、ヒト科なのか、哺乳類なのか、動物界なのか、もしくは地球最初の生命のことなのか曖昧である。しかも、いつ何が現れて、何が消えて、といった過去の膨大な時間軸の出来事を捉えることはいささか骨の折れる作業で、実際、「ホモ・サピエンス」というヒトの種がいつ出現したのか、という質問になると様々な予測が飛び出てくる。もちろん、化石の発見によって時代の出来事は更新され続けており、大体の推測はされている。では、なぜ地球の最近（5、6億年前くらい）の出来事になると急激に認識が混沌としてしまうのであろうか。それは46億歳の地球の歴史において、生物進化が急速に展開し始めるのがその時代からで、膨大な生物の出来事を事細かに認識するのは専門家やよほどの興味がなければ整然と覚えるのは易しくない。私自身も年表のような生命史はあまり得意ではない。しかし、生命の起源や進化を知ることが、生物としてのヒトの存在の意味について解き明かす方法のひとつであり、私たちの興味を捉えて離さない魅力的な話題である。

リチャード・フォーティ博士の本著は、40億年におよぶ生命の進化を単なる年代と出来事の羅列ではなく、自身の研究や教養、趣味と織り交ぜ、物語のように描かれている。フォーティ博士は化石の代表的存在の三葉虫の有名な古生物学者である。本書のなかでも三葉虫やカンブリア紀に水中で繁栄した生物をはじめ、最初に陸に上がった植物や栄華を極めた恐竜、哺乳類の台頭から人類への軌跡など、多種多様な生物が紹介されている。しかし、この本の面白さは過去の生物の多様な存在を知らしめているだけではない。化石発掘調査の体験談や、その最中に繰り広げられる人間模様、発見に対する様々な人の想いなど、無味乾燥になりがちな生命進化の解明に読み手が古生物学研究の当事者として参加しているかのような気分させてくれるところにある。新しい化石が発見されたときの感動や学会での論争、発見した化石生物の時代の大地はどんな様子だったのか、水中の生物が見上げる空の色はどのような色だったかなど、まるで見ているかのように描いてくれている。それらに対して、読み手が批判的になったり、納得したり、感心したりしながら生命の歴史を体感できるのがこの本の特徴である。

地球にたまたま存在した物質から生命が誕生し、そこから40億年かけてヒトが誕生した壮大な展開をぜひ一度のぞいてほしい。500頁にもわたる分厚い本だが、生き生きとした地球の歴史が身近に感じられる一冊である。

報告

第31回 うたとおはなしの会

平井恭子（幼児教育科教授）



平成30年12月15日に、第31回「うたとおはなしの会」が開催された。当日は天候にも恵まれ、親子連れを中心に156名の参加者で会場はいっぱいになった。まず、図書館長の村上先生のお話につき、「クリスマスのうたがきこえてくるよ」の音楽に合わせて学生たちが登場すると、会場からは、大きな拍手とともに、一緒に歌い始める子どもの姿も見られ、楽しい雰囲気での会が始まった。

最初の演目、パネルシアター「ねこのおいしゃさん」では、ねこのおいしゃさんが動物の患者に「にゃーっ」と掛け声をかけるたびに、会場中の子どもたちも「にゃーっ」と声を合わせるなど、学生と子どもたちが一体となって作品を楽しむ姿が見られた。続いて「ひげいさん」の手遊び(クリスマスバージョン)を体験した後、子どもたちは絵本「14ひきのさむいふゆ」（いわむらかずお/さく）の読み聞かせを鑑賞した。この絵本は、寒い雪の日にストーブが燃える部屋の様子が繊細なタッチで描かれており、参加者からは「大好きなお話が大画面で見られて嬉しかった」（4歳男児）、「(スライドで見ると)蝋燭の明かりが本当に灯っているみたいでとても綺麗でした」（3歳女児の母）などの感想が聞かれた。

絵本に続いて、音楽教育専攻学生が中心に活動するe-Projectのメンバーが登場し、クラリネットとカホンの伴奏で「赤鼻のトナカイ」の歌を披露した。会場の子供たちはおとうさん、おかあさんの膝の上で身体を弾ませたり、一緒に歌ったりしながら楽しい雰囲気が盛り上がってきたところで、今度は子どもたちも打楽器で参加し「あわてんぼうのサンタ

クロース」を演奏した。このような参加型楽器コーナーは今回も大好評で、1歳男児の保護者は「楽器を触らせてもらえて子どもが大喜びでした」と感想を述べていた。

そしてあっという間に時間が過ぎ、最後の演目、人形劇「こびととくつや」が始まった。「こびととくつや」はグリム童話の名作で日本語にも訳され長い間親しまれている。靴が売れない貧乏な靴屋のもとに、こびとが現れて夜の間に素敵な靴を仕上げてくれたおかげで靴屋が繁盛し、靴屋はその御礼にこびとの服と靴をプレゼントをするというストーリーである。今回は、演出上の工夫として、こびとが登場するシーンでスポットライトを使ったり、人間がお客さん役をつとめて臨場感を出すなどの手法を用いた。会場の親子はお話の世界にすっかり見入っており、特に、おじいさんとおばあさんがこびとたちへの御礼に靴や洋服をプレゼントするシーンでは、「よかったね」と顔を見合わせて微笑む姿も見られた。

人形劇が終わると幼児教育専攻1回生18名が「シングルベル」を高らかに歌いながら登場し、クリスマスムード満載の中、会が終了した。帰りには学生が手作りしたフェルトのブーツ(ブーツの中には折り紙の小人が入っている)をお土産にもらい、今見たばかりの人形劇のお話をしたり、クリスマスソングを歌ったりしながら楽しそうに帰っていく親子の姿が見られた。終了後の感想には「素敵な音、歌声と併せて、もうすぐやってくるクリスマスが楽しみになりました!」（6歳男児の母）、「大きい子にも小さい子にも配慮のある内容でとても良かった。2人の子どもたちがどちらも大喜びでした」（6歳男児、3歳児女児の母）など、好評をいただいた。

この会に何度も参加されている方にも、初めて参加される方にも、「来てよかった」と心から感じていただけるよう、これからも内容の充実をはかしていきたい。



京都教育大学
それはかなう夢講座
「先生になりたいーそれはかなう夢」は、
京都教育大学のシンボルフレーズです。

「それはかなう夢講座」では、本学の教職員が、学部、大学院のすべての専攻、研究科の学生や教職員の皆さんを対象に、科学の魅力をわかりやすくお伝えしていきます。特に、小学校の先生になりたいと思っている学生の皆さんのご参加をお待ちしています。

第15回を実施しました

1月31日(木)、附属図書館1階のリフレッシュラウンジにて「それはかなう夢講座」が実施されました。体育学科の小山宏之先生より「速く走ることを科学的に考えてみませんか」をテーマに、お話しがありました。

今回も、様々な専攻の学生や教職員で賑わいました。



<第15回の様子>

おにぎり2個&
お茶付き!
先着30名

※次回(第16回)は、5月の予定です。お楽しみに!!

【テーマ】「子どもと教師の温かな関係作り～科学的根拠が役立ちます」

【講師】佐藤美幸先生(発達障害学科)

主催:「現代的ニーズを踏まえた「理系」教員養成のための
カリキュラム開発」プロジェクト委員会
後援:京都教育大学同窓会・京都教育大学附属図書館

児童書コーナー (南館1階)

幼児教育科主催 えほんのもり

学生による絵本のよみかかせ

★2月4日(月) 14:30~14:45

『ちいちゃんとまめまき』他

★2月18日(月) 14:30~14:45

『はるのゆきだるま』他

学生作のチラシ→



今月の絵本カード (学生作)

『ないたあかおに』

文: 浜田 廣介
絵: 池田 龍雄
出版社: 偕成社

※児童書コーナーに展示しています。他にも毎月かわいいカードが飾られていますので、ぜひ見に来てください。



学修相談カウンター

理数系の院生がいろいろな質問に対応してくれます。勉強や就職のこと、先輩に相談してみませんか?
※1月いっぱいでは今年度は終了です。次年度は未定です。

春季休業に伴う長期貸出について

学部生: 1月28日(月)~3月29日(金)

院生・教職員: 1月12日(土)~3月15日(金)

【返却期限日】4月15日(月)

※卒業・修了予定者は3月11日(月)まで

日曜開館を試行しています

試験期間前の日曜日(2月3日)を9時から17時まで開館しています。試験勉強などにぜひご利用ください!

企画展示室 (北館1階)

<報告> どちらも工夫を凝らした展示で好評でした!

e-pro 京教木の实 その'魅力'展

1月10日(木)~1月23日(水)

化石ミニ博物館

(中等理科教育Ⅲ:中野先生)

1月17日(木)~1月24日(木)

<告知>

第三回はじめよう日本画(日本画研究)

2月5日(火)~2月15日(金)

<開催中>

附属学校・園・子ども美術作品展

子ども達のいきいきした作品がいっぱいです!

1月29日(火)~2月4日(月)

小学校教科内容「記譜」課題

優秀作品展示会

場所:リフレッシュラウンジ通路

1月23日(水)~2月6日(水)



教育資料館 まなびの森ミュージアム

休館中です

※3月25日(月)は9:00から12:30まで開館します。

今月の逸品(2・3月予定) 展示場所: 図書館

歴史科教授用参考掛図第八圖
「明治天皇御即位式の図」

詳しくはホームページの「今月の逸品」コーナーをご覧ください。

教育資料館まなびの森ミュージアム
<http://www.kyokyo-u.ac.jp/museum/>



論のくちび理のむすび

今回の執筆者 内田 利広(教育学科 教授)

親からの期待認知と大学生のキャリア成熟との関連 —大学生の現在の居住形態に着目して—

内田 利広・藤崎 このみ
京都教育大学紀要. 2018, No. 133, pp. 181-195.

子どもは、親の期待を受けて育つものです。親からの期待は、親の願いであり、愛情でもあります。ところが、時にその親の期待が、子どもの負担となり、思うように自分の人生を生きられなくする側面もあります。それを、筆者(内田)は、「操作的期待」として概念化しました(『期待とあきらめの心理』内田、創元社 2014)。

本論文は、そのような親の期待が、大学生のキャリア成熟とどのような関係があるのか、また、そのような親の期待の影響が、自宅生と下宿生とでどのように異なるのかを検討したものです。まず、自宅生と下宿生とでは、日々親と接する時間が異なり、自宅生の方が親から毎日プレッシャーを受けたりして、期待認知が高いのではという仮説のもとに、分析を行いました。そこには差異がありませんでした。つまり、親と同居しているか、否かによって、親からの期待認知に差は認められませんでした。これは、親からの期待認知は、小さい頃からの日々の積み重ねにより感じとられたものであり、数年程度親と離れても、それほど変化するものではなく、子どもの中に親の期待がしっかりと取り込まれているのではないかということが考えられます。これは、皆さんの実感とも一致するのでしょうか。また、親が子どもへの「人間性期待」(人として優しく育ててほしいなど)が高くなることで、学生のキャリアレディネスを促進することが示されました。つまり、学生は、親から健やかに育つことを期待されることで、将来の進路実現につながっている、ということが言えるのではと思います。詳しくは、是非本論を一読してみてください。

※本タイトルの論文は京都教育大学紀要 133 号に掲載されています。

※京都教育大学リポジトリ「クエリ(KUERe)の森」<https://ir.kyokyo-u.ac.jp/>でもご覧ください。

開館日程 □9:00-21:00 ■9:00-17:00 ■休館(CLOSED)

2019年2月						
日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28		

2/4-2/8 後期末試験

2/25-2/26 前期入試

2019年3月						
日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

3/6 館内整理日

3/12 後期入試

3/25 卒業式

●京都教育大学附属図書館ホームページ

<http://lib1.kyokyo-u.ac.jp/>

●携帯版 OPAC

(QRコード→)

<http://tosh2.kyokyo-u.ac.jp/webopac/mobtopmnu.do>



京教図書館 News No.221 (2019年2月号)

発行日:平成31年2月1日

編集発行:京都教育大学附属図書館

問い合わせ先:library@kyokyo-u.ac.jp

国立大学法人
京都教育大学
KYOTO UNIVERSITY OF EDUCATION